

独創性と先駆性

南山大学名誉教授 石田 裕久

南山短期大学人間関係科、人間関係研究センターは、おそらく「人間関係」という四文字が冠せられた、日本で最初期の高等教育機関ではなかったかと思います。それ以降、多くの大学に人間関係学部やら人間科学部が設けられていることからわかるとおり、南山学園には珍しく、独創性と先進性を備えた組織の設置でした。

私が研究員として加わったのは、センターが南山大学に移管されてしばらくしてからのことでした。人間関係研究センターといえば、自他共に認めるラボラトリ体験学習のメッカですが、当時は「コンテンツよりもプロセス」「非評価の姿勢が重要」といった惹句に強い違和感を抱いていました。プロセスに注目し改善を図るのは何よりもコンテンツのためだし、「評価」とは自分自身による「ふり返し」と同義だから、体験にもプロセスにも評価は不可欠だとの考えからでした。

おそらく、人間関係科や人間関係研究センターの発足当時は、人間関係なんて一体何をやる場所なのか、そんな教育が高等教育機関として必要なのか、といった頑迷な批判にさらされてきたための標語だったと思います。しかしながら、これまでの先駆的な活動が認知された今となっては、コンテンツとプロセスが車の両輪であること、体験の自己評価はどうあるべきか、ということ正面きって唱えるべきだと考えています。

私は、教育心理学の担当として協同学習を主たるテーマとしてきました。そして、10数年にわたりセンターの「協同学習ワークショップ」講座を持たせていただきました。この講座の受講生のほとんどは、理由はわかりませんが、いわゆるセンターの常連ではない方々で、その傾向は今も変わりなく続いています。私がセンターに対して幾ばくかの貢献をなし得たとすれば、これまで南山大学の人間関係研究センターをご存じなかった方々に、講座を通じてその存在を知っていただいたということではないか、と思います。

ラボラトリ体験学習と協同学習の源流を辿っていくと、ともにグループダイナミクスの創始者であるクルト・レヴィンに行きつきます。文科省によるアクティブ・ラーニングや主体的、対話的で深い学びなどが謳われるに至って、ようやく世間がセンターのコンセプトに追いついてきたといえるのかも知れません。